

今月のトピック

厳寒期に向けて
管理の変更点を確認しましょう

11月下旬からは、日射量が減り、本格的に気温が下がるため、光合成が不足してくる時期です。保温や葉面積など、冬に向けて管理を変更する箇所を確認しましょう。

厳寒期の管理

①暖房機の準備は出来ていますか？

予想最低気温によって、ハウスの換気を変えていきましょう。トマトの場合、予想最低気温が、10℃を下回る=暖房機を稼働させる目安となります。急な冷え込みも想定されるため、暖房機のダクトを準備しておきましょう。

②圃場内湿度は高すぎませんか？

圃場の相対湿度が95%を超えるなど、多湿状態ではありませんか？多湿状態が続くと、灰色カビ病やうどんこ病をはじめとする病気の発生リスクが高まります。暖房機が稼働しないうちに、保温のために急いで保温でカーテンを閉めると、圃場内は多湿状態になりやすいです。湿度も意識しながら、保温管理をしていきましょう。

▶具体的な管理の方法は、
[過去の栽培サポート通信（2022年11月 特別号）をチェック](#)



③排液率を確認しましょう

排液量のばらつきが少なくなる時期です。排液が出てきているかどうか目視で確認し、排液率は10~20%を目安に管理していきます。

④果実が葉に隠れていませんか？

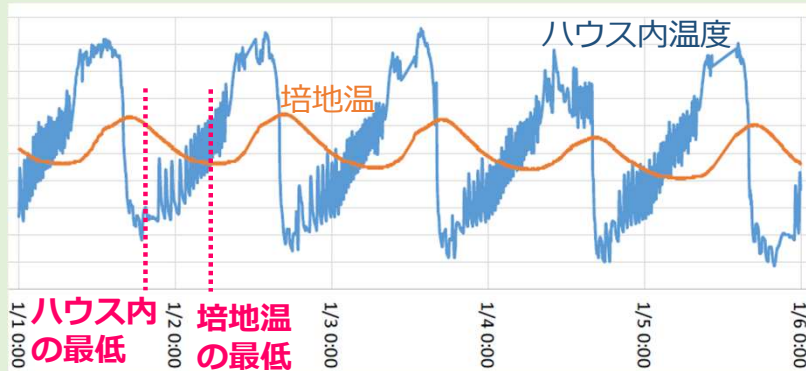
平均気温が下がってくると、果実の成熟がゆっくりになります。果実がいつまでも樹に付いている状態は、樹を疲弊させ、なり疲れを助長します。夏季よりも葉枚数を減らして、果実に光を当てることで果実の温度を上げ、実離れを良くしましょう。

参考：開花～果実の成熟までの積算温度
トマト：1000℃ イチゴ：600℃

+α 夜の温度管理について～培地温確保は後夜半の温度管理がカギ

ココバッグ栽培では、最低値に到達する時間が気温と培地温でズレています。培地温の最低値は日をまたいでから早朝にかけて下がっていきます。夜中の0時以降にしっかりと温度をかけてあげることで、培地温が下がりきらないようにします。

トヨタネ研究農場（2023年1月1日～6日）▶



0時以降～早朝にかけて最低値に到達